広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|---|---|
| Title | 『自分』への扉をひらく心意伝承～特に犠牲論に関して～ ： 上原輝男講義録① 日本教育史特殊講義（昭和59年度）より |
| Author(s) | 宮田, 雅智 |
| Citation | 国語教育思想研究 , 29 : 40 - 45 |
| Issue Date | 2023-03-01 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053958 |
| Right | |
| Relation | |

# 『自分』への扉をひらく心意伝承　～特に犠牲論に関して～
## ―上原輝男講義録①　日本教育史特殊講義（昭和５９年度）より―

キーワード　心意伝承　犠牲論　身替り

児童の言語生態研究会　宮田雅智

はじめに

心意伝承に関して、上原先生の次のような言葉があります。

「おまえは何かの専門家だろうというふうに言われること自体、本当に好きではない。なぜかというと、それは自分にとって最も関心のあることは、日本人とは一体何者なんだろうということである。（中略）わが身体の中で何が響いているのか、どこに私を連れていくのかということが、やっぱりこの年になってもなおかつ忘れられないのである。　無意識が私をどこかに連れていく。その無意識というものはどこから成立してくるのかということが知りたい、また興味がある。そういうものを心意伝承というのである。（中略）

もっと心意伝承学をやろうとする人が増えてくれれば、人間の幸、不幸の問題など、簡単に解決するだろうと思っている。』

（日本人の心をほどく　かぶき十話　主婦の友社　P. 172）

『心意伝承の研究対象は、研究者だけが知っている対象ではない。一般の庶民が誰でも思い起こせる対象でなければならないのである。』

（曽我の雨・牛若の衣装　－ 心意伝承の残像－暮らしの手帳社編集　P. 9）

つまり心意伝承の探求はすべての人間にとって大切なことであるわけです。事実私は家庭教師という立場の中で中学生～社会人の方々に上原先生の説かれる日本人本来の発想を紹介してきたのですが、人間について関心の深い若者・得点力偏重の学校教育になじめない・この社会の中で生きていくことに悩んでいる人たちに、先生の言葉は非常に深く受け入れられていました。

上原先生が取り上げている題材は非常に多岐にわたります。あらゆる分野を「日本人探求」に関わることとして捉えていたわけです。ですから「小学校国語教育」「歌舞伎」「民俗学」等々の専門家という見方をしないことが先生独自の考えの全体像に迫る王道となるわけです。

そうした観点から、玉川大学文学部教育学科で行われた４つの講義の録音テープから起した記録をもとに、次のように構成しなおしました。

講義録①　日本教育史特殊講義

先生が生涯を通して追い続けた「日本人」の根底にある心意伝承に関すること

講義録②　国文学

中世日本人の意識世界から人間を育てる上で日本人が大切にしてきたこと

講義録③　国語教材研究

人生すべてを支えていく母国語獲得について、生育環境や言語観を交えながら

講義録④　児童言語の研究

「子ども」への向かい合い方には大人が生きる姿勢を子ども達から学ぶ側面もあるということ

すべての講義が、小学校教育を主とする教育学科の学生対象の講義ですのでどうしても「教育」という視点からの内容になっています。

しかし教育という枠にとらわれずに、これら４つの講義録抜粋全体から、上原先生の全体像が少しでも感じられ、みなさんの人生をふりかえることのお役に立てることがきれば幸いです。

まずは「日本教育史特殊講義」の講義録です。これは上原先生の博士論文「心意伝承の研究　芸能編」（昭和６２年　桜楓社）の執筆過程での下書きをもとに行われた半期の選択科目でした。履修している学生の大半は上原研究室に所属している３～４年生でした。

講義では先ず、博士論文の大まかな流れを紹介しながら「心意伝承」とはそもそも何か、心意伝

承を考えることが教育に如何に重要か、等々について語られました。

後半、具体的な内容としては数ある心意伝承のうち「犠牲論」について語られました。

今回は心意伝承の概略や、何故犠牲論を教育学科の学生対象に取り上げたのかを述べている第１回～第３回の記録を中心にまとめています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

１，すべての人間は「伝承体」

第２章は「伝承の概念規定と特に心意伝承としての対象限定」ということを問題にしております。

教育でもですね、これは「伝承過程」でしかできないんでありますからね。

私は教育は方法学であってはならないと思っているんですよ。究極のところでは方法学であってはならんのですよ。一切やっちゃいかんというのではないですよ。それは進めるためには仕方がないのなら・・。だけどそれはあくまでも試みなんですよ。

そちらの方が今は強くなっていますから、人間存在のつかまえかた自体がですね「消耗品扱いになっている」ということなんですよ。存在を消耗品にするから非行少年なんかでるんですよ。子どもたちが非行を働いてしまうんですよ。だけども人間存在が伝承なんだというような構え方が生まれていましたらですよ、非行なんかできませんよ、人間。そうでしょ。私の心っていうのを考える時にですね、私の心はどこにもなくて、みつかってくるものはすべて伝承されてくる心ばかり、それを考えてみましょう、ということです。

ですから、最近ユング以来活発になってまいりました「深層心理学」、これとは関わりをもっています。心意伝承の問題は深層心理学とは関わりをもってくるだろうとは思うんです。だいたいユングという人が深層心理学をどっからヒントを得てきたかっていうと、東洋の学問なんですからね。

第３章として「心意伝承の素材的研究対象とその範疇」　そこで去年取り扱ったのが「予兆・予感」。まあ私なりの言葉ですけれども先験的心象という言葉を使います。自分が経験を積む以前に、自分が経験によって知る以前に「そんなことは知っていた」ということがあるってことです。

ところが今日の教育学なんていうのは、こんなもん全く取り上げていないんですよ。だから面白くないんですよ、今日の教育学は。経験によって経験のための、なんてそんなアホなことばっかりやっているから。やらなければならない教育学はこっちです。経験に先立つものです。我々の心がそういうものを持っている、ということです。

君たちは子どもを扱うんだから。むしろ子どもの世界というか、まだ学校教育に汚染されていない子どもたちは、こちらで生活しているんですよ。全く学校教育が汚染させてしまうんですよ。こちらの方がずっと強いんですよ、それでなかったら人間なんて生きられませんよ。

何か知識がなければ生きられない、そんな馬鹿な事があってたまるもんか！って。そういうものを無視して子どもたちを学校の成績だけで「勉強できない」なんて落伍者みたいにいうんだから「くそったれめが」と思うのは当たり前じゃないですか。みんな学校の先生が悪いんですよ。

第３節は「行動伝承と心意伝承」その一番基本にはっているのは何かというと「人間は心も行動もすべて伝承から切り離すことはできない」ということですよ。

２，心意伝承の具体的事例

第４章は、「心意伝承の様式的事例と、その感情的構造」。この様式を生み出しているのも感情対応なんですね。様式的事例を考えることによって日本人の感情的構造を考えてみようと、こういうことです。

先ず第１節は「犠牲」と考えてみようとしている。教育というのはね、私はこういう問題を考えなければならないと思いますよ。「身替り」なんていう問題が出てくるとですよ、じゃあ「個性」というのはどうなっているんだろうか？という問題がすぐ出るはずですよ。日本人は個性ということを考えなかったんだろうかと。身替りになれるという思想なんですから。あなたと私と取り替えっこしましょう、という考え方ができるんですもんね。そうだとすると日本人が考える教育とは何だったんだろうという風に考えていけばこんな面白いものはないですよ。

そういう点を教育学の人がですね、もっと指摘しなくちゃだめですよ。日本教育史の人がもっと頑張らなければならないし、西洋教育史の人も我

々が西洋の学問をやるなというのではないんですよ。我々が何故西洋の学問をやるか、それはやがて自分の国に帰ってきて、自分の国・日本人のことを考えるために外を眺めることをしているんだということですよ。それなのにもう出っ放しで西洋のことしか知らない。むしろ外人の方が一生懸命日本のことを学ぼうとしているのに日本人が日本の事をさっぱり知らない。

「犠牲」これはね日本人の人間存在のあり方と関わってくる問題だということが言いたいんですね。だから個性というのを日本人はどう考えていたんでしょうかね、ってこと、それは人間存在の、つまり基本的な考え方が西洋の発想とは全く違うということですよ。「我は我だ」なんていうのは日本人は発想できないんですよ。だからそのへんのところで日本人は「のりうつる」という考え方を持っているんだと思うんです。乗り移ってくる。そうすると我々の体は入れ物なんです。何者かが乗り移ってくれないと我々の体は働きをもたないと考えているんです。

「幼神」なんていうのも教育学の人は絶対に問題にしておいてほしいところです。一体「幼神」っていうのは何だろうって。だからフレーベルだけが児童の神性なんていうのを初めて思い付いたんではないんです。日本人なんてとっくに知っているんです、そんなこと。それを教育学の人がやらないからです。日本人の幼神の信仰というのをやらないからです。

第２節は「落人」を取り扱う。「敗れ去った」なんていうのは美しいじゃないですか。「勝ち誇っている」なんて言ったら馬鹿みたいに見えてね、敗れ去ったなんていうと何だか同情が一変に沸いてくる。だいたい日本人は悲劇好みですから。この悲劇性っていうのは一体何なのか？もう昔からそうなんですよ。神様が零落するんです。おちぶれるんです。その印象を持っているんです。折口先生が言われた「貴種流離」というものに関係がある。落ちぶれているのは貴種だったんです。貴種だから落ちぶれていくんだ、と。

次は第４節。眷属の問題を考えてみようとしている。みなさん、眷属というのはちょっと馴染みが薄いかもしれません。人間関係というものは構造を持っているんですね。で、構造的に人間関係を考えてみる事をしているんですよ、人間はいつの時代でも。個性尊重の教育だから１対１、そんなことばかりやっていたって駄目なんです。一人一人を大切に、なんて一人一人を隔離したって絶対に子どもはついてこないですよ。集団性というのは大事なんですよ。個性尊重の教育と集団の教育は相対立するなんて思ったら間違いですよ。集団の中の「個」でしかないんですから。子どもなんかまだまだ個別学習よりも集団学習の方が楽しいんですから。

その次は「見顕わし」。日本人の「出たー！」ってやつですよ。「出る力」を持っているから出られるんですからね。小さい頃から歌い続けてきた「出た出た月が」って。「出る」ということに関してね、日本人は非常な何かを持っています。

これと似ていますね「身替り」。乗り移るものがある。身替り方は乗り移るものがあるから変わっていくんだけれども、霊魂が飛び出すっていうことですから。

こう考えると日本人の霊魂観というのはね、これも天才だからかなわないと思いますけど折口先生が言われたように「空中を散歩する」。日本人の霊魂は散歩しているんですね。ぶらつくんですよ。折口先生の使われた言葉で言えば「遊離魂」遊離魂的な考え方があるからですよ。だからフーワリフーワリこの中に入ったり、出ていったりするわけです。

歌舞伎はみんなこれをやっているんですね。みなさんの知っている言葉で言うとね「正体」っていう感覚ですよ。「正体見たわよ」という正体ですよ。正体はそこにいるはずなのに、それとは区別して「お前の正体は・・だろ」と、こう言うのは何故かということですね。

もう一つ例をとっています。それは「道行き」です。日本人っていうのはこういう生活をしているわけです。気になる挨拶がありますよね。昔の人は気にとめなかったんでしょうけど「どちらへ」ってやつ。私は「どちらへ」というのは目的地を知ろうとしているのではないと思いますよ。日本人の大切な言語観に「言語過程観」というのがある。こんな捉え方が出来るのも、日本人は「過程・プロセス」を問題にできる国民だからですよ。

ところが今、教育はそういう捉え方をしていないんですよ。だからせっかちになっているんですよ。過程を大切になんかしていますか？この学習

をして満点を取れ、なんてことではないんでしょう！こういう意識が持てるのは日本人だからですよ。だから私が「方法を教える」とか「教育方法学」があまり好きではないというのはそれですよ。

３，犠牲論（身替り意識）を教育の根底に据えて

今回の講義では犠牲を取り扱ってみようと思います。犠牲・身替り。犠牲を何故取り上げるのか？本来的な意味から言うと、犠牲は「神に捧げられる生け贄である」。しかしそんな説明をいくらしてみたところで誰も満足はいかないんだろうと思います。やはりそれは犠牲が我々の心を揺さ振るのは、それが人間らしい一つの精神現象だからであるということにおいて、犠牲にひかれるものがあるんだろうということなんです。神に捧げるというような習俗、具体的な習俗、それが止んでしまったこんにちの我々においてすらも、また、そういう経験を全く我々は持っていないにも関わらず、我々の人間活動において、それが意識できるということ自体、心意の上に伝承があるということを認めないわけにはいかない。

子どもたちに「犠牲とは何か」といって辞書をひかせ、そして辞書的な意味を理解するという事とは、今言っていることは全く違います。

その点小学校の先生になる人はよく心得ておいてくださいね。学習というのは何か辞書をひかせて、その言葉の意味を覚えさせる事だ、なんて思ったら絶対にいけないんですね。

（西洋舞踊の話題から）西洋の場合はあくまで自分なんです。上原輝男がここで演じるんです。ところが日本の芸能はそうではないんですよ。上原輝男があってはいけないんですよ。どんどんどんどん上原輝男が消えていく事によって、それは素晴らしくなっていくんですよ。この違いなんですよ。その違いは何故なのかということになると、この神人交感の原則を持ち出さなければならなくなってくる。それを日本人は犠牲と呼んでいたんだということです。

これから教育学と関係が出てくる。身替わり、ということになるわけです。本来の交感の原則から言ったら身替わりというのは誤った解釈だと思います。「私は誰それに取って代わりましょう。そして私の命は失われてもかまいません」っていうのが身替わりですから。だからこれは本来の犠牲の、日本人が考えた犠牲、つまり神人交感の原理・原則がわからなくなってしまった時に生まれる言葉だと思うんです。

しかしこの身替わりっていうのはね、教育学でつかまえなければならない大きなテーマです。そう思いませんか？身替わりっていうのは全生命がかかるんですから。そうでしょ。人間が、私が誰かの身替わりになるというのは、私の人格・私のすべて・持てる物すべて、それと私が身替わりになろうとする人のすべて、それが交換されなければならないわけですから。そうだとすると、そこにはそれなりの人間観があるハズだと考えられる、これが教育学の問題でないというわけがない。

日本人とは何かという事を考える時に「身替わり」ということを考えるのは素晴らしいテーマだと思いますよ。犠牲の問題を具体的にしたのが身替わりですよ。そしてこれは大事な問題なんですよ、教育学として。

絶対にこれだけは教えておきます。日本教育学という書物を読んで今私が述べている問題が入っていなかったらそれは日本教育学にはならないと私は思います。それぐらい重大な問題です。何故かというと子どもの問題が身替わりには入ってくるからです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

解題

現代社会では「本当の自分」「自分らしく生きる」「自分探しの旅」等々「自分」に関する言葉が盛んにとびかっています。ところが実際に多くの現代人が「自分」についてますます分からなくなっているのではないでしょうか。あるいは逆に他人の存在を無視しての身勝手な考えになってしまっていることも少なくありません。

こうした要因の中には、日本人の体質とは異なる文化の発想が大量に入り込んできていることもあるのではないか、というのが上原先生の主張の一つです。先生は教育を「農業」とよく例えられていました。ある作物にとってふさわしい育て方が違う作物によってはかえってダメにしてしまう、それと同様に教育学でも心理学でも精神医学でも海外の方々にとって有用なものが、日本人にも有用であるとは限らない。それなのに、海外の発想が常識とされ、結果として悩まなくてもいいことで悩み、追いつめられ、場合によっては病気

扱いされてしまうことすらあるわけです。

だからまず「日本人とはそもそも何なのか」を根底から明らかにしない限り、教育も心の問題も社会問題も真の解決に向かえないだろう、というのが先生の主張です。

心意伝承を深めていくとユングのいう集合的無意識（人類としての共通性）と重なる部分がでてくるわけですから、日本人独自ということが身勝手な方向ではなく、国際社会の中で真に存在感を発揮していくことにもつながってくるわけです。

上原先生の思想（それは長い時間をかけ自然との生活の中から直観し積み上げてきた本来の日本人の思想なわけですが）に迫る際に大きな壁となるのが用語です。普段使われないような難解な語句もそうですが、さらにやっかいなのが日常でよく使われる語句でも現代人の使い方とはかなり違っている場合があることです。ですから、知らず知らずのうちに大きな齟齬が生じ、「何をいっているのかさっぱり分からない」ということになりかねません。そもそも表題に入れた「自分」という語句からして、現代人の多くが考える意味とはかなり違っています。

「犠牲」「身替り」が教育、さらには我々自身が自分の可能性を広げて生きていくことにつながることとして位置づけられているわけですが、それも通常の「犠牲」「身替り」の意味を念頭にして読んでいたのでは、どうして関連していくのかが非常に分かりにくいと思います。

＊「身替り」の発想と関連して「型」に関する先生の語録を紹介しながら私が書いた　『世界定めの主体としての我：全生涯を貫く児言態的視点』内「芸事の世界にみる日本古来の発想」で京都の舞妓さん・芸妓さんの例をあげながらふれています。（広島大学学術情報リポジトリ＞児童の言語生態研究１８号　検索で閲覧できます）

「無意識世界」についても上原先生の立場とは全く異なる「抑圧された自分」「捨て去られた負の感情」のたまっている場所とする見解があります。その中に心意伝承という重要なことが隠れているとはなかなか思えないでしょう。

心意伝承の立場からの上原先生の教育観の大きな特徴の一つに、子ども達を教育の対象のみとしてみないというのがあります。子どもを「心意伝承の世界を探る存在・純粋な世界に誘ってくれる存在」としても捉えているのです。「稚児研究」がそれにあたります。

「はじめに」で紹介した言葉の中に「無意識が私をどこかに連れていく」とありますが、この作用につて上原先生の師匠の一人である折口信夫先生は「生命の指標　らいふいんできす」と称されていました。子どもの存在とは、まさに大人や社会にとってのライフインデキスであるということです。（「曽我の雨・牛若の衣装　－ 心意伝承の残像－」　平成１８年　暮らしの手帳社編集　に関連した論文があります）

実際に先生が博士論文として書かれた「心意伝承の研究　芸能編」の目次には心意伝承の具体的事例として次のような項目が並んでいます。特に「教育」関係の方々からすると、「反教育的な内容が多い。これが教育に役立つのか？」と思われるのではないでしょうか。

**第二編　その形と心の各論　－ 心意伝承の様式的事例とその感情構造－**

**犠牲論　－ 身替り－**

**落人論　－ 神々の零落－**

**心中論　－ ぬば玉の黒馬に乗りて－**

**道行論　－ 前わたりの芸能－**

**”殺し”と”血”の心意伝承　－ 血饗の衰亡－**

**付”実悪”の本性　－ 悪にかたぶき身が流儀をまなぶべし－**

**第三編　その行動伝承とのかかわり**

**「無頼の徒の芸術」その後　－ 擬勢という誇示**

**任侠　－ その感情的摂理としての試論、”やくさむ”ことへの思慕－**

**（注）「犠牲論」「殺し”と”血”の心意伝承」内では「うらみ論」も含む**

「はじめに」でもふれたように、今の社会の中で自分は何なのか、どう生きていくのかを必死に探っている若者たちにとっては、これらに述べられている言葉で目から鱗が落ちた感覚になったと言います。先生が後に　構えの変革・意識の転換　トランスフォーメーション　と呼んだことが起きているわけです。

＊こうした点に関して、上原先生の言葉を紹介しながら、主に就労支援施設の方々との関りについて私がまとめています。

国語教育思想研究　　21号

母国語教育の支柱としての「構え」、再考：連歌の発想を取り入れた就労支援施設のグループワーク実践から（広島大学学術情報リポジトリ＞国語教育思想研究第２１号　検索で閲覧できます）

心意伝承の論文の多くは「かぶき」を題材に述べられています。かぶきを素材としてとりあげている理由について先生はこう述べています。

『戦後の日本人は戦後の教育が間違ったか、徹底したのか、心は自分のものだというふうにみんな考えるようになってしまった。そして我が心は自分で自由にできるというふうに、自信過剰になってしまった。

しかし、自分の心は自分の心でありながら、自由にできないのが本当ではないのだろうか。自分の心だという以前に、もう自分の心はつくられている。（中略）

日本人には日本人の心の偏向、偏りがあるということである。あるいは趣味といってもいい。好みがあるというおとである。こういう問題を歌舞伎を通してふりほどけたらと、考えている。（中略）なぜ私が歌舞伎を取り上げるかというと、能（謡曲）よりも歌舞伎の方が知識人がつくっていないという理由からである。庶民がつくったものであるから、理屈があってつくっているわけではない。つまり、偏向がまま、偏りのまま、好きな放題につくってきたということである。（「日本人の心をほどく　かぶき十話」　P.10～　平成７年　主婦の友社）

この発想を現代の若者文化であるアニメやゲームに置き換えて考えることができると思われます。いわゆる宮崎アニメや、「君の名は。」「すずめの戸締まり」などの新海誠監督アニメのような作品ばかりではありません。むしろ大人が眉をひそめるようなアニメやゲームの中に、心意伝承が確かに存在すると思われる共通項が多数見出せます。自分達が好きであっても、学業の妨げになると頭ごなしに否定されがちな事柄の中に、心意伝承の証となる事柄があると知って、学問的興味に目覚める若者も少なくありません。

さらに重要なのはそうしたアニメなどに響いていた自分の存在が根無し草ではないという証を得られた感覚にもなるということです。

退職された頃から、ますます先生の関心事は日本人そのものの探求に注がれていきました。月例会でも探求の旅の成果として「馬」や「曽我兄弟」の話が多く語られました。その頃の成果が後に「曽我の雨・牛若の衣装　–心意伝承の残像–」（前掲書）としてまとめられていますが、正直いって当時の私は「民俗学の話はそのくらいにして、早く教育の話をしてくれないかな」と内心思っていました。「馬や曽我兄弟」について「こんなことが今回分かってきた」と熱く語られていたのですが「だからそれが何なの？（学校）教育とどう関係するの？」という気持ちが強かったのです。

そうした私の姿勢をかえてくれたのが、家庭教師で出会った若者たちや社会人の方々です。「教育」という縛りがないので純粋に面白がってくれる、自分達の身近な話題とつなげてくれる、そんな姿勢から私自身が変えられてきました。

先ほどもふれましたが、中学生～社会人の心に深い傷を負った方々に、犠牲論・落人論（貴種流離）の話題は本当に響きます。そしてそこから意識の転換を起こし、日常生活そのものも変容する方々が何人もいらっしゃいます。それこそが心意伝承のもつ教育力とも言えましょう。

心意伝承はとても身近な事柄なのです。

参考

☆上原先生「テレビ作家の教育力」発言

子どもはいつでも夢を見ている。その中に先生だから入れるということでなければ、(ならない)。

ガンダムの世界、子どもの世界、夢の世界に働きかけている。（これが、）テレビ作家たちの仕事、教育力ということから言えばテレビ作家たちの方が優っている。教育の世界に(は)、子どもの世界に触れるものがない。

１９９２年（平成４年）９月１５日　月例会

参考　心意伝承に関して、上原先生の弟子である本荘雅一氏が學燈社「國文學　解釈と教材の研究」２００７年１０月号から２１回に渡って連載したものもあります。